

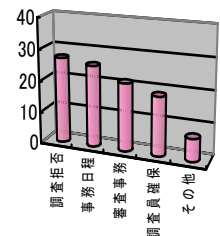
1 統計より愛を込めて

- 立命館大学長を務められた法学者、故末川博氏の言葉に「六法全書に愛という文字は無かりけり」という言葉があったように記憶しています。要するに、法律は無味乾燥だということをお願いしたかったようですが、日頃、地味だとか縁の下の力持ちだとか言われる統計はどうでしょうか。
- その答という訳ではありませんが、終戦直後を生きた一人の公務員を紹介します。昭和 21 年 5 月、「統計制度改善に関する委員会」の前身である統計懇談会が設立され中村四郎氏（国統計局総務課長）が担当となりました。氏は、自ら原爆の後遺症に苦しむ身でありながら、統計委員会事務局の総務課長、統計局の総務課長、経済安定本部の統計課長という 3 つの課長職を担当し、奥様の看病と死別という辛い体験をしながら職責を全うし昭和 23 年に亡くなります。
- 中村課長が人生の残りわずかな時間を「統計制度の基礎づくり」にかけた想いを「愛」と言ったら少し飛躍でしょうか。統計より愛を込めて——現在、私たちが関わっている統計の中には、中村課長だけでなく現在に連なる多くの関係者の想いが伝わっているような気がします。
(週刊エコノミスト「連載・昭和史への証言」1987. 12. 8 より)

2 「さあ〜っ、工業統計がはじまるぞ！」

市町村職員の悩みは？ 今年も、12 月末日を調査期日として「工業統計調査」が実施されます。県経済統計室と県内市町村の統計担当職員は、11 月上旬、県内 3 会場で打合せ会を行いました。その席上、県経済統計室は市町村職員の皆さんに「工業統計調査について気掛かりなことは何か」をアンケートしました。その結果は、調査拒否 19 名 (27%)、事務日程 18 名 (26%)、審査事務 15 名 (21%)、調査員の確保 13 名 (19%)、その他が 5 名 (7%) でした。やはり、「調査拒否」が最も多く約 3 割、「調査員の確保」も約 2 割となっています。(右上グラフ)

市町村職員の悩み
(回答70名、%)



静岡の統計づくり、力を合わせて！ 打合せ会には 70 名 (3 会場) の市町村職員の皆さんが出席しました。国勢調査の審査真っ最中でもあり、「どう国調進んでいる？」「格付けは？」等々、会場では国調事務の進捗状況を情報交換する姿が目立ちました。そんな中、「国勢調査事務も必ず終わる時がきます！」県経済統計室長の明るい声が会場に響き渡りました。(右下写真) 一つの統計ができるまでには、多くの時間とお金、そして想像もできないほど大勢の皆さんの協力が必要です。これらのどれ一つが欠けても、私たちの生活を支えるのに足る統計（正確に実態把握できる数値）はできません。「工業県しずおか」は、ものづくり関係者だけでなく、統計づくりを担う関係者や統計調査に応じてくれる方々の活動と協力の上に成り立っていると云えます。

